

~ 13
3584
4



雙城蝶白糸冊子第四帙

合歡の巻

東都 芍藥亭主人著

て家産のころおくしつひ。郭内のさしひさ人かまごれど、郭
の外ふらうむるまの家をかりて、潜居とぞ。いつまで、親族の
扶助を受て、世にさぐとせん。敷下ふのほりて、いつまでも、さや
と思ひ定り。人も告知らせど、父の記念よ、又よとて、さ
太刀を佩あぐべし。身もあぐべし。庭ふおしき。ふこぞ
てあがらたふとぶ神なれ。よくと念のみごもいのりよ。さ
て。氷上山妙見の社よ、一夜とぞ。後来往年のみごも、さひつら

四先

13
3584
4



中
伝
巻

早稲田 十巻 図書館
昭和 35. 2. 2
蔵 書



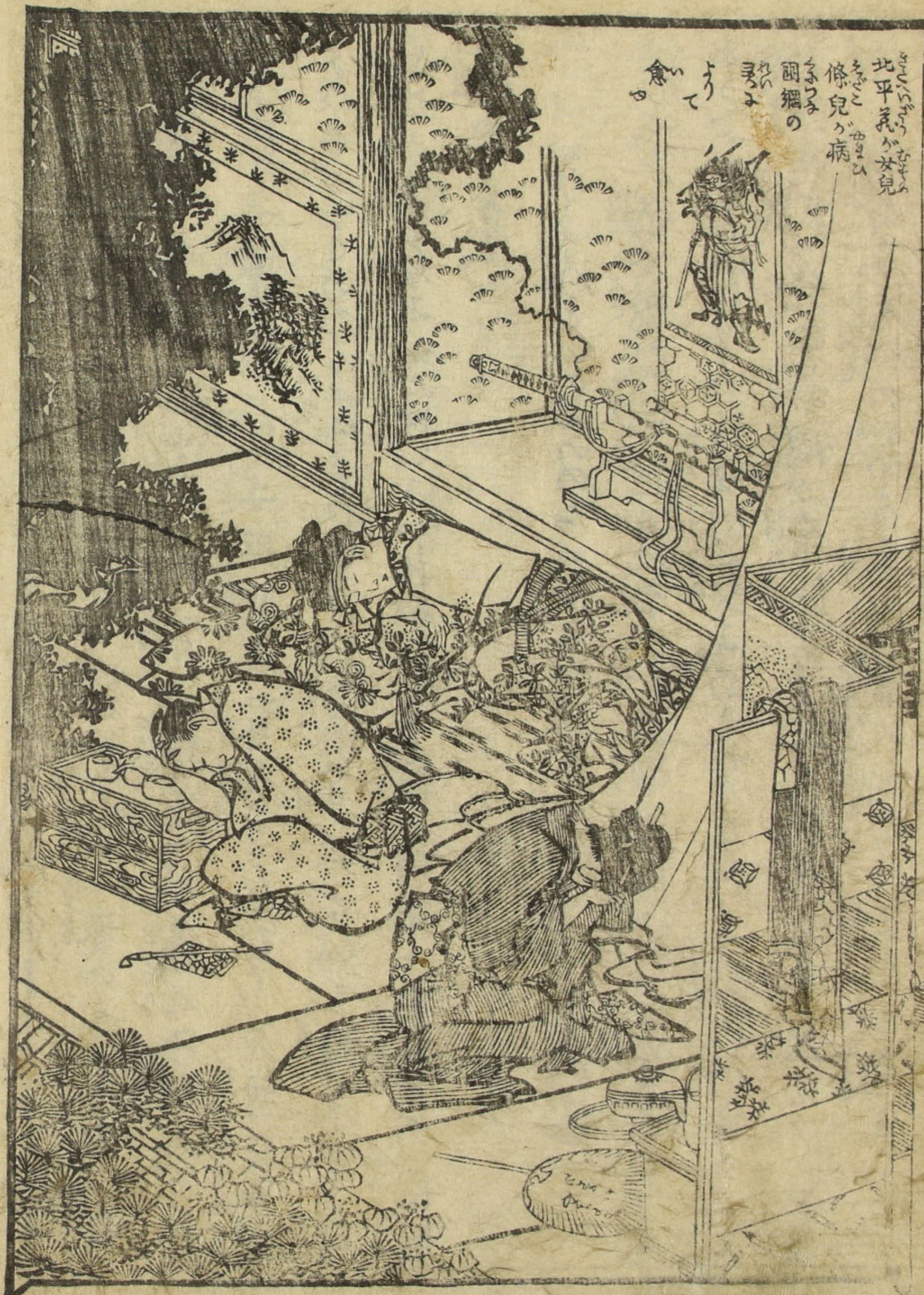
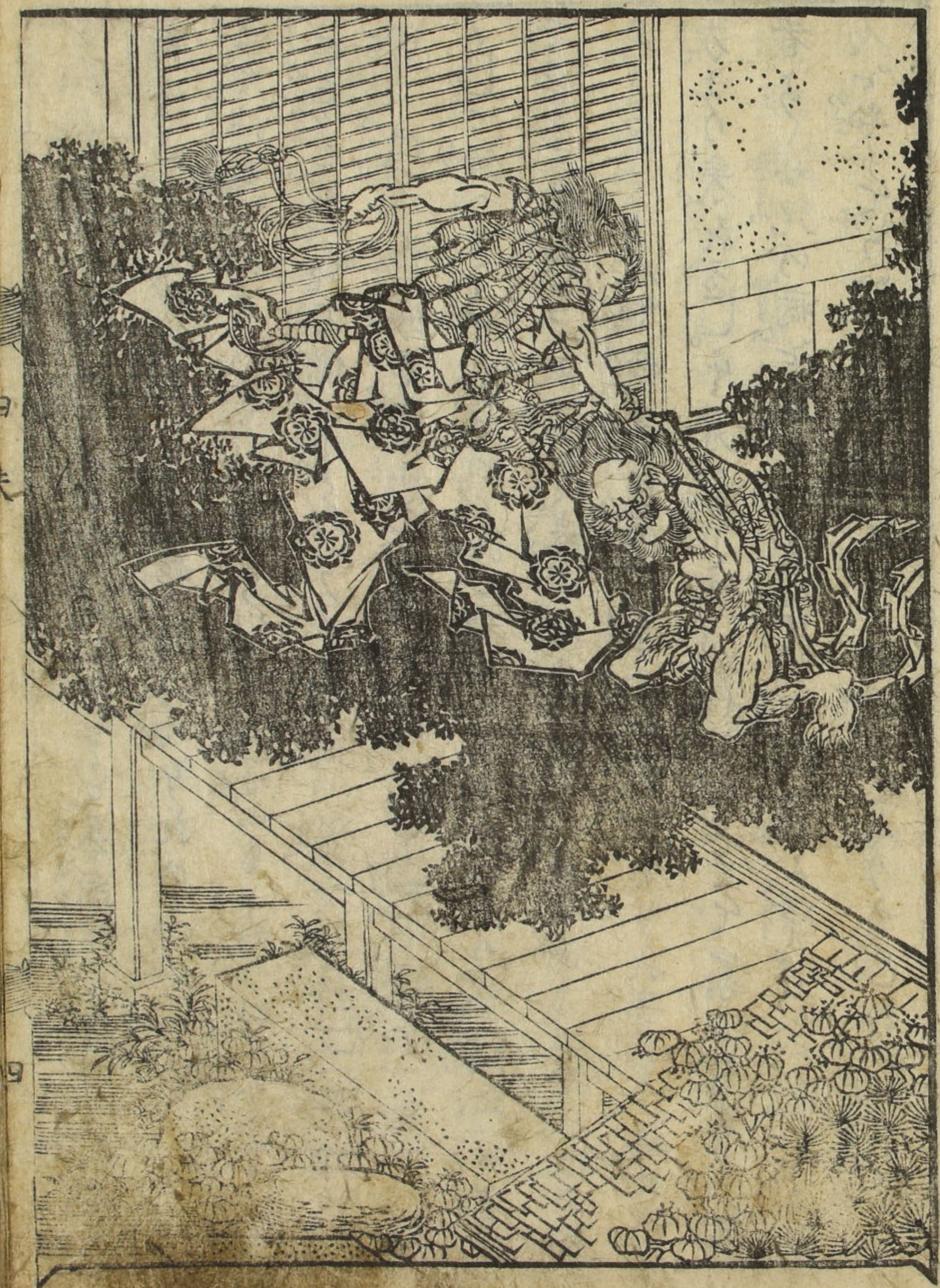
舟の幸ひさうりに公神つうれて打まどはる。夜の明となれば
におどろきと枕上の苞を携額突てまんとすれ時。膝のま
落るものあり。何ぞとまにたりゆげんとは。ちひされうの
なり。ひたれえぬ塞翁馬の三字大や々に諫書とりし
書し。善も善も非悪も悪も非との神のまじへなれどしと。
心どのにしてま歸れ道をが。苞の形おのれが結とれとたがひし
やうにまひたれえに刀のかざり自の携とれよりそろうふ
て又ゆ又のいうふうと敷函を脱えれど鉄鏽つうじて又文え
えとあがじ。今先考の遺物えりしうひついうみせん。んまの
これなくの忘るひまろと詠人もあじものを我太刀装のゆ
くて他の装れらるじたと換もせむ。其処よ尋み人もあへん我

太刀のまろりぬれを再社頭ふいりて待居ともうひなをのぞし
あまも又塞翁が馬彼も又塞翁が馬なりとて。それより先君乃
墳墓まあり。其夜と四里あり行くと天神山の麓に宿りて
と。いそぐ旅あもあはばとあはて堂に腰うちかけてやと
ひ居れ側も人待がなれ翁幸翁をえれより腰をうめて近
あゆみより。旅人と宵此ありに宿りてあはれ宿りてえ
為とくより待居れあり。さうりおくの翁ともあといめ此
あより旧識もあはれをいうもといおり人どもあひて結へ
あはれ翁の後もあはれが大路より丸の方一町をかり入りてい
なれ家といえあ。うちより主人とえゆれ不惑余の男ま
るる客房も伴ひ入り。名調して茗果とあへ湯にひりせ酒飲を

さくら盛年さだめ妻をくらせとえぬ男なども出まひ敬ひし
 げくゆいせん方よし幸哉の牙のあぐこを愧て名も不
 所縁ゆれ人もあつたげし。見づしとむらう旅なるをかく
 為らんと。ゆくゆやしひ居るけしひ小主と流ばる。情実と不告
 ぐ公おら居るんざれこそことよりがれ不同がりの長話と夕
 やらうがゆふ世系がいにしゆんも嗚呼まがら僕も北条時頼の流
 まりし故ありて鎌倉の亡がれ前より此國は踪を隠し氏を北
 とわらためしれバ誰知る人なうて後醍醐天皇四海を知らせり
 御代も疑とま又近年同姓の関れ東は興一あり招きと僕
 平氣まで累代官爵の外へ欠とれるみなくやとく世とおろく
 これなれ平太と十九女妹を條兒とて十五女がれを月花と

はりの居る公よめを雲もまうりしと女兒此春のまじりより病
 病小感て医生みえされバ邪祟の侵どら流。薬石の敵ふぞれ
 あらびとて薬餌と不子巫覡解魔招うがれなく。符章禁咒請
 ざれはしといふど露まじなく。發首の日にそひて瘦ゆる。命
 も殆あやめお公くしとされかど形。僕らのちと安藝の園巖
 寫ふまらて。

うらふんといのりののらひとしかくせうてもこうんとのほし
 とつれ歌を歌ひ琵琶くたあして徹夜法樂をうてまつり。身
 おうてりといのりうれ曉の夢よ。あて中なれ上臈ののさゆふを
 赤漆衛門が兒の拳周が命にうらふんといのりハ拳周マクして
 学の聞あり大江の家と参議音人卿より夫の匡衛ありとれ



四
勝

4で名高と人々出く家聲はおとさきと。挙周早く卒べ。大江の水
再清さんみり歎しめて。愛情の切なれのみあふふ。さきば
とそ住吉の神もあはれとえまひく。母子もさわり形。挙周成徳
匡房とほびて。儒宗とらなりきれ。彼の家とおひて。其母。その
男。代人に。汝を愛ふわごえん。其父を。女。代人と。日。同
くして論べさるゆい。されど汝が積善の余慶あり。女兒天資考ま
て。い。う。と。命。数。う。ふ。不。可。妻。と。汝。と。又。因。な。れ。あ。ら。び。な。ら。ど。う。あ。い
と。と。又。ん。ん。や。疾。家。お。帰。て。某。の。日。苞。を。負。う。る。青。羊。山。に。乃
か。よ。り。素。衣。を。し。そ。身。を。買。と。え。ゆ。れ。と。い。と。と。で。家。ま。ら。あ。よ。この
者。よ。く。女。兒。の。病。を。愈。え。ん。と。の。告。げ。か。に。家。ま。帰。と。て。と。そ。路。上。お
人。と。出。し。て。う。か。が。り。と。お。ふ。と。し。て。卿。の。身。り。あ。ひ。け。れ。卿。い。と。さ。

術ありて。女兒の病と除めんやといふ。幸哉いよ。あされまどひ。
僕巫覡。あ。あ。ら。び。医。ト。お。あ。ら。び。全。人。と。か。ひ。な。ん。と。い。ひ。と。け。ど。
笑。い。れ。ど。先。病。体。と。え。ま。へ。と。請。ふ。力。な。く。と。後。の。内。お。あ。ひ。た。れ。か。
家。と。出。く。よ。り。路。費。の。外。身。も。携。し。その。と。此。苞。の。内。を。た。り。刀。を。り
形。り。と。て。主。お。む。く。ひ。此。刀。を。前。夜。氷。上。山。妙。見。の。社。あ。て。人。の。取。ら。が
へ。と。物。出。して。其。傳。を。た。れ。故。を。知。ら。ざ。れ。か。又。異。あ。ら。ん。も。測
が。し。と。と。苞。と。出。して。主人。よ。う。く。せ。と。平。藏。と。ら。や。く。あ。く。あ。く
い。と。い。ち。が。て。女。兒。が。卧。房。お。架。壺。ま。り。其。夜。素。袍。お。主。冠。戴。し。男
女。兒。の。夢。お。入。り。て。僕。汝。が。病。を。除。ん。と。す。と。と。父。と。く。け。が。は。し。
そ。こ。て。お。お。り。あ。ま。り。形。ら。び。汚。と。清。め。得。さ。せ。て。よ。と。告。ぐ。明。且。此
み。双。親。よ。語。る。よ。う。と。し。く。彼。刀。の。契。な。ら。ん。と。幸。哉。よ。請。ひ。柄。を

ちりしてとじりて刀莖がえれへ鑽太やうも國綱と鑄付よりこれ
 へこそとてその日山口の府城より一人の研工を雇ひしり磨礪の
 功をとりて打こざりてととたえれ鑢のりともり少しわがりく一
 のひろらうなれ鏢なりて清の驚か如く夫より上も亀文やど
 よくはくならで碧とこたれる又鈍の色唇を冷し如灑金星文
 の光眼を射て気聲なれりいふむりは平藏夫妻を
 いとこのもまゝおひて巖島の方をふ一拜夜お入とを
 二人ともお枕上お付そひ寐も中のでめりしお曉ちうた
 ころ架壺一刀のこひぐら一道の金光ひくめれいおれとに
 か後房お物の響ありて之四月卧し居る女兒らうよげ
 に起あり二親お對て兒今夢ともなくささじ夜夢見し素袍

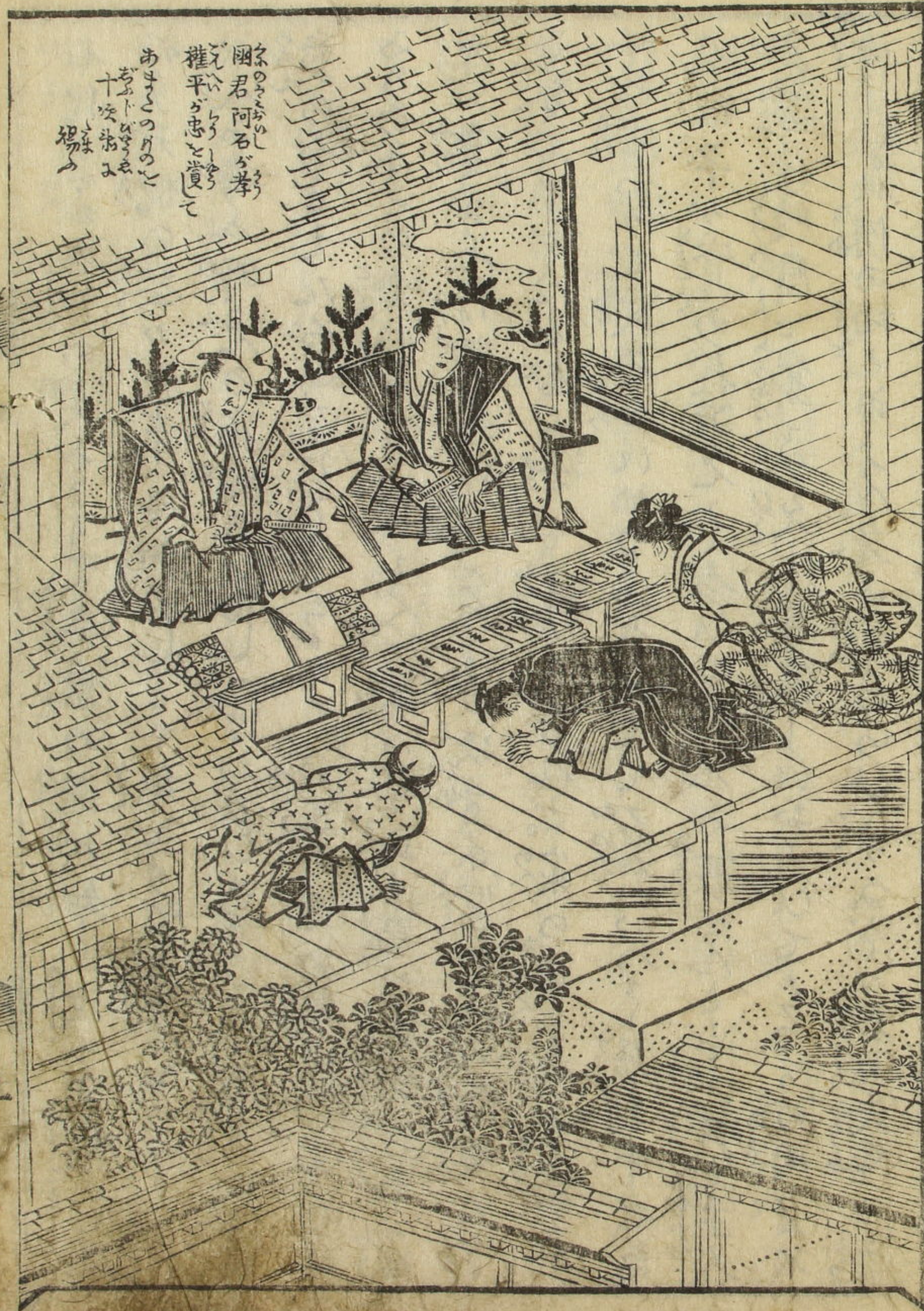
お圭冠戴しれ男清らうお装束してまよひとつの鬼ととへ
 あり。汝が病今より愈へ。積年の汚を清められらうと
 よしととゆれと見え公平日おえりぬといふ双親のようそび
 たとあるおそのお。さるめても後房のお音こそあやし
 ちれと行く見えば床の間お掛ありし鐘櫃の掛画其と
 へとれ鬼お刀痕ありて外お夫ぞと見えとれ奉じ。平太を
 よびて此画しごとより持ありて誰が掛置しぞと問ふ。この
 春文庫の裏お入り。書どもあはれさぐりめとめれとてそま
 ぞ梁上おひとつの箱おれをりてあ出し。内をえしおあの一軸
 あり。ひんたえと壁奥あまこたし。ちらひぬとてこたえ
 と神彩不凡が愛と此処お掛をながら。家尊お同ひして

まろれると忘るなり。何人の画めやさぶらふのとりよ。平賀眉を
あつめて此画我庫めあれるとども不知いせんや画一人とや。
祖先故ありて梁上ふ秘画めひしなる人。此鬼灵ありて此
鍾馗灵ありしといふとて。眼とくめて熟視ふ。鍾馗の
眼精と鬼と捉へて指をちりてあり。印章さへなられ
る画人と知るがれよしもなし。人ふ邪崇を為その後世遺
るたふあつて禁をてせけれとぞ。劔と画ともよ灵
われこれを入ふ比を智群を出しそのなり。劔の灵ありて
人を救ひ画の灵ありて人をやせり。劔のさふとせれ画を
禁とぬ。人々智とらうとも用る処善なるべし。此画の類ひ
なり人々幸藏ありひたり。父がれりの巨萬の財を擲て劔

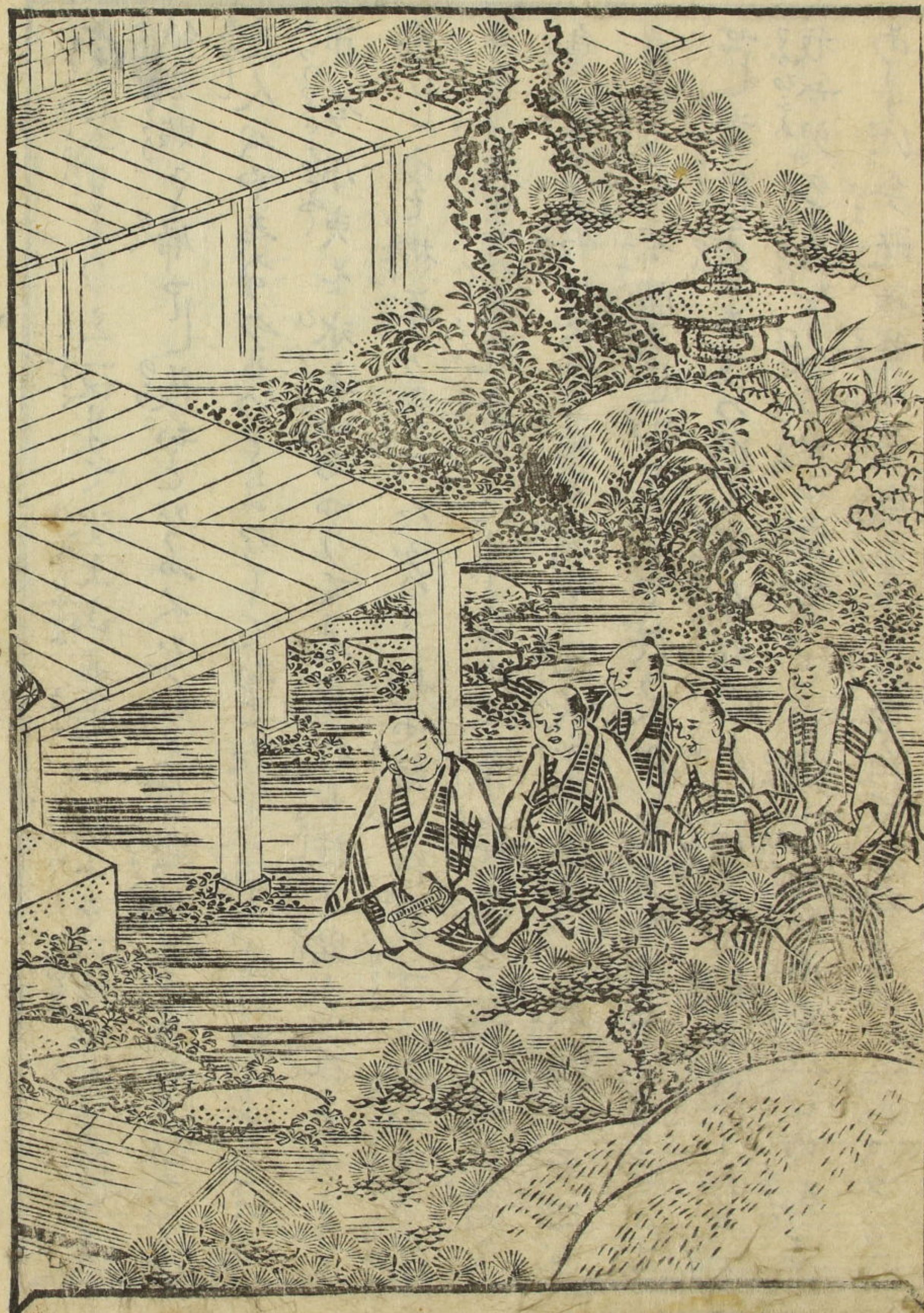
我愛しつひハ刀劔の為小家とらひ地を追ふ及へぞの
実ハ一口の良刀を不得我ハ一夜氷上山に籠りてありひも
かけぞうの灵劔人の与る。禍福人カのおよぶとと流
人智のさうれべきにあつて。往年父の命がけけく書の真
仮と同菅原氏に就て。此刀足利家へ献て家と興を
よとがとなりりやせん。いで都小上んとて二三日とらて暇
告ぐ知んとそれを。平賀が全家今あじとあひてとらひ小
公よろも又一旬むら此家小さまり居る。此こと大内家
小使えく其ころ石見の園三本松の城主吉見頼信小塚
あふさる翁主の物再魔あふりありとて彼刀をせしし再
病くらまらににおこらせまひ返した年入む又病おらあふ

よみて。代の金を賜ひ永く大内家小をわんとて。刀の主は
おに幸藏今にけり。この縁で。徳澤兵衛といふもの。男
て。あつぐのりあて父ととも。府城に追まらる。あつぐは
語のほく。平蔵も人表のりやし。かぶさし。さこそとて。幸
が。出處氷上山ふこりて。刀次よりかへら。巖嶋の言
よ。て家おとめ。あつぐ。画と刀の。其のり。さこそとて。あつぐ
記。平蔵より。縣吏ふ就。國主ふ奉。幸蔵が。先
太刀の装。詳み。りして。此太刀。藏。おれ。者。と。訟。出。よ。と。領。ふ
觸。られ。れ。鴨。草。十。次。兵。衛。が。家。生。の。權。平。彼。太。刀。を。携
市。令。小。吏。自。訟。出。る。お。又。い。う。あ。も。の。れ。外。の。装。美。大。と
取。と。ぐ。え。り。その。り。訟。出。り。し。お。こ。り。成。と。ぐ。ら。れ。權。平

その翌日より。一夜まで。氷上山。通ひ。柱。お。その。故。と。書。き。し。る
紙。を。貼。り。屏。に。後。お。と。な。ふ。人。な。け。ば。訟。出。ん。と。い。ひ。さ。ら
主人。お。や。あ。つ。ぐ。の。あ。い。と。な。な。て。お。と。た。ま。居。し。は。し。か。あ。つ。ぐ
市。令。小。吏。を。氷。上。山。お。り。て。え。さ。お。柱。お。貼。し。れ。その。り
あり。し。あ。ぞ。權。平。の。言。の。た。が。り。お。疑。と。け。数。十。人。の。奴。僕。の。中
子。唯。一。人。主。人。の。先。途。を。え。と。ち。ん。と。年。来。登。る。馬。次。遊。ひ。新。を
傳。夜。を。殺。は。ら。り。延。次。織。主。人。を。やし。か。ひ。お。忠。を。石。見。が
糸。の。災。を。不。懼。る。し。が。た。え。や。ば。久。し。て。父。と。か。と。い。あ。つ。ぐ。と
せ。し。孝。行。す。で。あ。つ。ぐ。れ。市。令。ぬ。う。く。感。國。主。の。聽。お。違。け。し。は
我。女。兒。の。災。を。人。の。女。お。負。せ。ん。と。ま。同。じ。類。を。あ。つ。ぐ。の。お。お
あ。つ。ぐ。今。既。お。我。女。兒。鬼。宗。お。侵。さ。れ。て。石。見。が。糸。を。や。む。り。な。り



家阿石の孝
権平の忠と償
あまのついで
十次おき
想



石兒が家の刀の刃夫よりて病愈ぬ。過次知り改められたるの過
り。天倪の益かり事を知じして紙をりて象入とつくりて
人へ授けし。野元の宿稱のいほしへもおりひあをせし。國主の博
愛のわざぞたぐひなれ刀をとりて公利主の刃の護とし。十次兵坊
あへの事との金教丁の田とそへて石兒を返し賜ひ。石兒控平の忠
孝と賞まふ。鴨野草の家これより次子も富ねれば親族の中
子賢あなふんとむめ者も多うりされど。家の衰へ時不知らず
せられ者いうて父のむにかるめなれとて石兒かつて語ぞ。十次弟
を權平が實あねとえくあひて石兒も娶せんとせしむれと主人
家富れ時恩と蒙るみえし。其衰へにおよびてちつりの間身取
りし。これ何の切りあふん。えも負ねりひるるがら。君臣夫婦の道

より大りなれしとこそらけありは。はじめ臣として後その主
成妻とよび。はじめ主として後其臣と夫とかくはく。禮もともせし
義もそむく。家の榮を基あふべし。阿石の方れ孝既も國も
は。佳婿を得る日あふぞ。と詞とじくりひとさし。些
もやられけしひなく。中ごろ貧うりし時ひとつたがりたつえし
うば。權平が忠義の名世も高くせえま。又標漆幸花もは。り
らぐられし太刀と返し。美劍の主と賞んる。石兒訟て自刃と奪
つと。篤といへん。家産をらしなひし。伏も憐し。と。成成。湯
住とのほし。若干の米錢と賜ふ。北平藏を女兒が病愈へ。と
おひめぐら。もに紅絲の緒と神の志るべ。あまな。んとて。徳見
を幸藏も嫁と。力もえし。より。標漆の家も再よ。と。ひり

忍場の巻

大内家の頼主と山城國粟田口の治工林弥九郎藤原國成と
男。左近衛將曹國細がつられ太刀の靈よりて。鬼症頓おにぢま愈
多し。ひりなく吉見頼信の館よりかりし。天倪と城人小撫と
ひり。國細の太刀れ牙の護となりぬれぬ。数人の天倪もまた
おふこそ。さて大内左京大夫義貞大永六年三月石見の國
軍出。女塔頼信ふかとて。尼子経父の属城六所を攻
落し。三隅兼隆入道が城を初秋より季冬まで攻られ。兼隆
入道後援を請ふよりて。経父出雲伯耆備中美作の勢を催し。
富田の城を打出しに兼隆入道堪う終て季冬のじり。降て。
長興城に入り。やがて國中を打ちこへて。濱田の郷小軍をこむ。

経父と赤穴より濱田を打ちこむ。其間五十余町を隔て陣を張て。
合戦度ありて後五十余日むらじ居て戦なれ。起り山名政豊
伯耆の國小軍を出すと告ぐ。経父驚く南条小鴨行松を
此つひえ。おのりて出雲の國を襲んぬ。危くる。とて。興へ使を
立て。軍を還しぬ。義貞も石見の國半をたて。打ち。敵の分
み。のりて出雲の國へ。と。議ら。し。小。冒風のころ。おり。し。日
を。おひて。病重。お。より。て。諸將の諫。み。を。こ。が。ひ。山。は。あ。を。帰。ら。ん。る。
か。し。し。る。府。城。も。何。と。な。く。さ。さ。さ。じ。り。し。う。と。さ。せ。れ。病。も。あ。い。さ。ぞ
や。ど。な。く。お。こ。さ。さ。せ。ま。り。ん。と。諸。医。の。い。ふ。に。曙。の。方。へ。移。る。と。い。ふ。を。
て。や。世子。周。防。今。義。隆。あ。い。永。上。山。お。より。て。北。辰。妙。見。の。い。の。り
めん。み。み。さ。め。自。所。生。の。子。五。郎。義。順。あ。い。鼻。祖。琳。聖。王。太子。歸。化

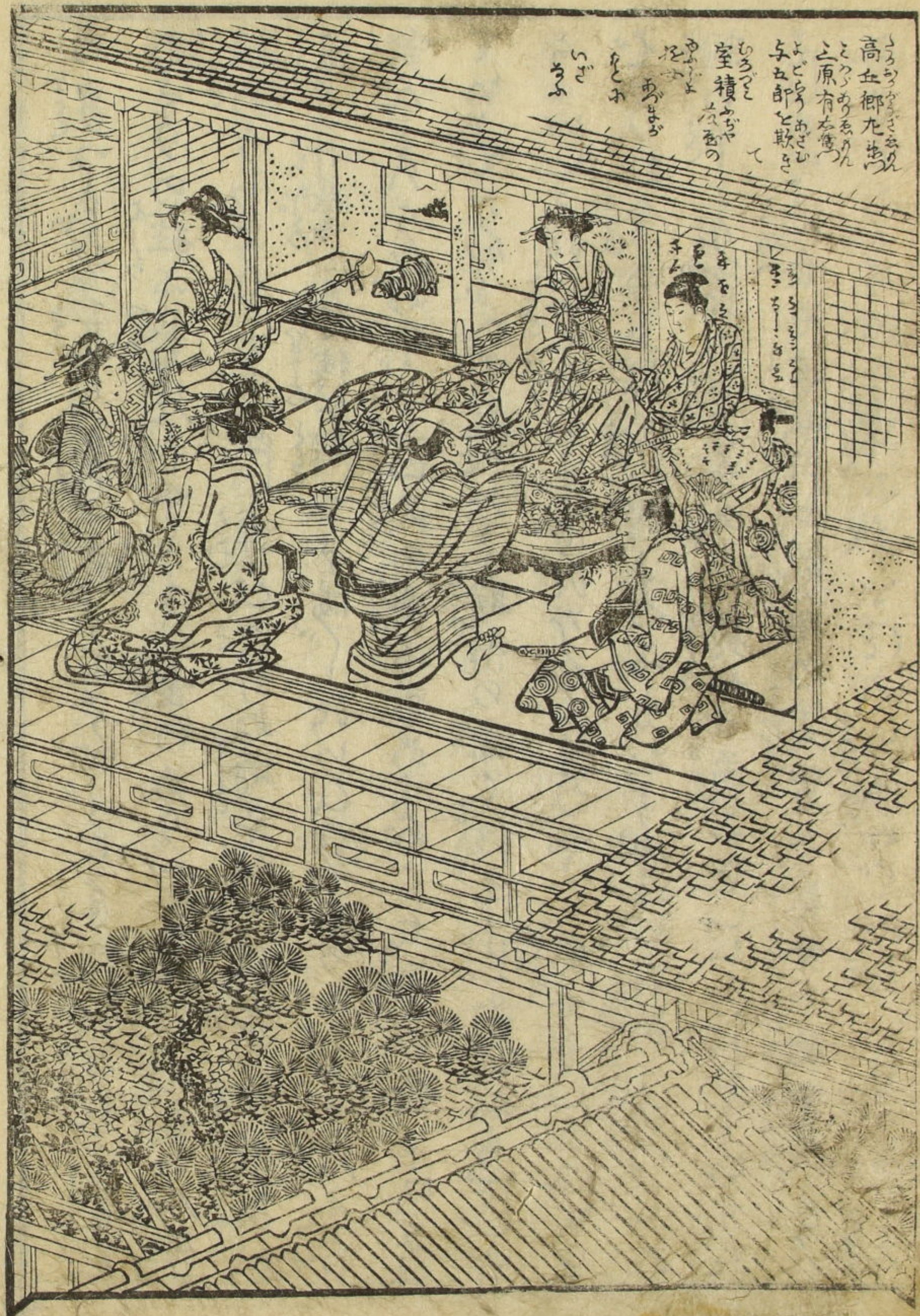
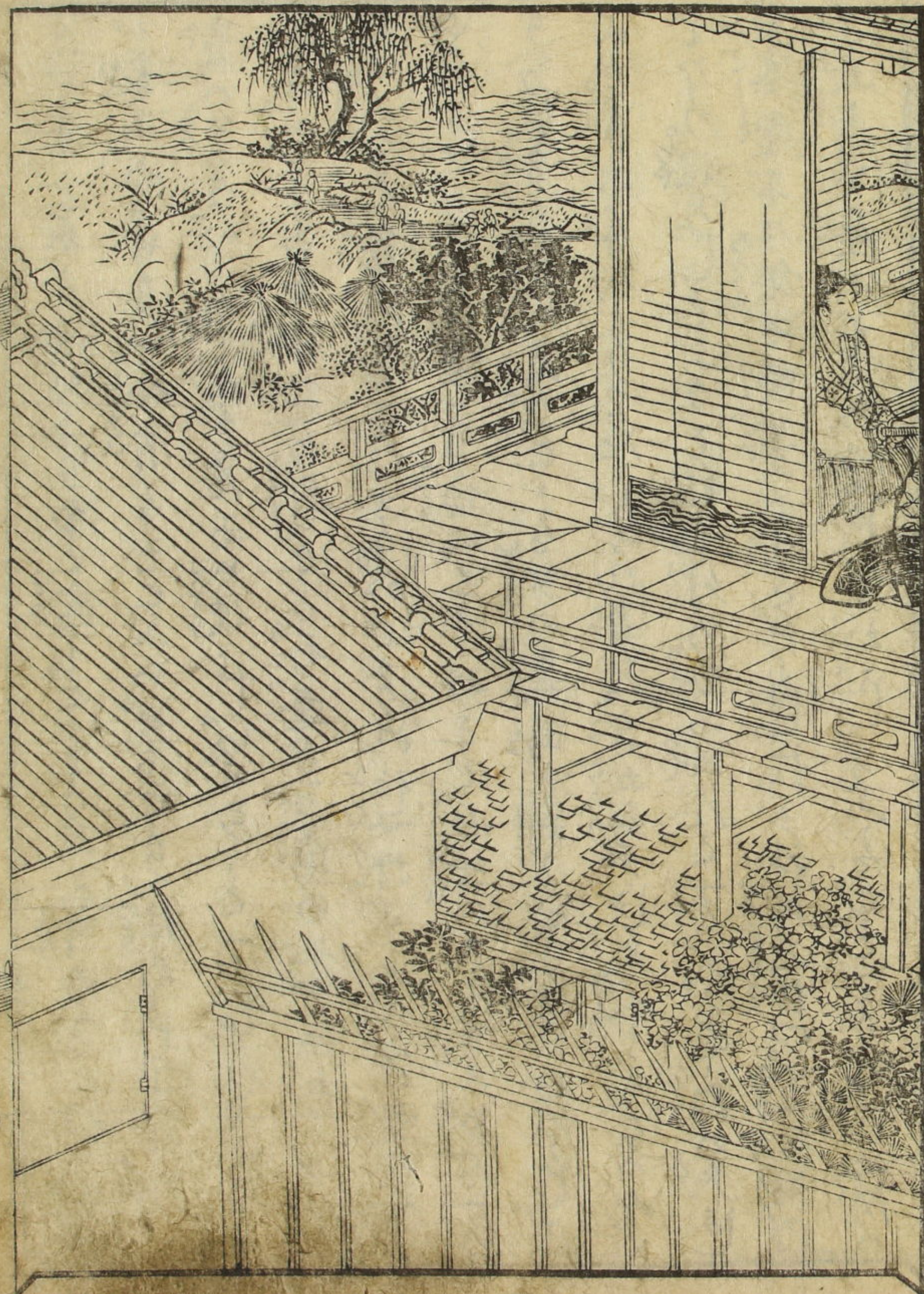
まふ時ふ携し多く良濱の昆沙門天岩園の庄横山麓麓たる
不動明王とせしめ室積の普賢菩薩よ祈りて人として生まれ
これの義隆よりハ義順の父とおりの公の母とせしめんと
しぞと告るそののり陶入道を麒麟ひそくによほとび兼く我順ハ
付おとし腹心の士高丘郷左清の三原有右清の友人と招よせ
何ふやらんやあむくくさやとせしめ知る人となえとまりしとぞ
山は五郎義順と生年十七の旅りづしく見ますと名勝旧地
も多まると父の疾のこほりとなく多く良濱の昆沙門天より
岩玉の不勤明王ふゆとてこひ帰路室積の普賢菩薩ハ
詣日も西小傾む其夜と社傍の房小宿翌日を朝とせしめ
おん高丘三原の友人あんとややとてよと願ひたまひ。蝶吉

一人と側小壺と。老僧とをのがかりしておんさねお御左清門陶入
か手れと披露して君候の汚病おこりまじくして生平小か
せまふまじし公子はいのりれ為小遠く出せまふり次よほとび
おがして又おりひまんともかこうおさじよたはりてなんが領玉の
名おれ地えりぐりて帰こまふとよしまらせとのりあてまふ
と聞ゆれを五郎もよほとびおひ父上の汚病おこらせまひ
こひしとせし上まらしかれまじ。明日を船めて海蔵の嶋
の南より江の浦えりぐらんと夜の明れと結まひ其日も
は郷左清門有右清の両士酒肴をどよとくくの侍臣の仕
らもに歌ひつ舞つ酒酌ふ。夏のじりめの長と日も西小浸ん
とせしころ江の浦船よせと。五郎陸よ上人とせしめ

コ
夫
コ
夫
コ
夫
コ
夫

十五六むかりなれ處女岸のわたりゆきまき掌と申せ。あやうく
 び目の没方とふしとぞと長袖の袂に石をとり入る。左右の股に
 かき抱き。絶崖高く。海水深き方に歩みゆく。あれとぞあよと
 りとねとは前より上りし仕士をくくるとまうくして。あやうくも帯の
 せしげらへてさうとむ。情知りまき放して死せきたまはれと泣
 きあれとあひて船中誘き。よ五郎情実を御た請つ小回をさる。
 處女やありて顔とわけ。妻と此浦に住れ。医人の女あてさる。あ
 う父と山口の府城に薬次請人ありて前月より行く家あめ
 ぞ。此やとやとひた方より。真珠。麝香。犀角。地黄。人参。まどの
 料として。あづかりおとしあまこの金次後の母今朝普賢をさる。あ
 ほうづるとして。妻よよく家とさる。居よと出行し跡。あ平日も則

ね男つと入り。妻よ声とてさせと手中に口にとまらせ。
 あらりの柱に繫ぐ。とやより金のありごと。あはれ。あはれ。あはれ。
 櫛のうらよりとり出し。奪ひ去りぬ。時をたて隣家の老嫗訪ひ
 あり打驚とて傳を解てさへぐにらひる。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。
 秋んとらひかへど。この四友の金もあはれ。あはれ。あはれ。あはれ。
 ていうでながらへあはれ。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。
 らるじさ。よ五郎おもとば。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。
 むろり。金もあはれ。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。
 詞の下より。多の金より出く。處女が前より。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。
 じめて。え合きよ五郎。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。
 顔さとあうめ。御九請つ。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。



高丘御九
上原有在
よごす
室積
あまの
なこ
さ
さ

四 帖

まじ。妻が家と此処よりむと遠く。とより二町あり。こゝに
か家お入る。せまひ。今宵とそこおやどせ。入住めし。これ賤
家の。夏ながら月。ん多らん。あ。便よし。ととくとす。むれ小と
家。宿う。あも。旅寐の。奥ぞと。打連。道のおど四五丁。ゆ
いと。大る。家おし。ご。あひ。まり。かむ。り。れ。伯母持。ん。あ。金。改。令。の
と。て。せ。ま。じ。と。り。ご。も。金。の。さ。く。お。と。と。仕。士。の。と。と。ま。さ。あ。ん。そ。の
ら。ら。に。多。の。女。出。ま。り。こ。と。と。女。の。集。島。と。知。せ。と。は。り。ぬ。を。し。こ
よ。と。と。お。あ。て。な。り。て。た。と。が。れ。あ。れ。よ。五。郎。と。じ。め。人。も。と。り。み。ご
ア。なり。禮。さ。し。と。り。と。お。し。外。の。か。お。出。んと。す。れ。ば。と。や。門。の。戸。じ
て。客。館。お。り。銀。の。燈。臺。あ。ま。と。も。し。け。と。糸。御。左。衛。門。有。右。衛。門
よ。五。郎。と。座。お。と。め。い。ぶ。じ。く。お。お。し。あ。あ。と。こ。と。こ。り。お。り。此。所。の

室積の花街前お牙と殺んとせし。處女と此家の妓女吾嬬ととく。
前月此らるるに。おと。ち。づ。れ。と。い。ま。と。標。客。と。も。い。う。入。と。れ。は。業。と。
此。れ。ど。君。候。の。病。あ。て。勞。し。ま。れ。ゆ。と。病。を。な。ぐ。と。あ。ま。り。な。り。せん。
為。臣。等。兼。く。い。ひ。あ。く。ち。お。は。し。俳。優。あ。て。と。あ。ぐ。お。お。り。一。夜。妻。と。も
よ。が。れ。と。一。夜。の。何。う。と。し。か。ん。と。聞。く。標。吉。と。れ。も。と。り。よ。五。郎。の
動。静。と。り。か。び。て。言。と。も。出。と。と。し。が。こ。に。い。り。て。ん。れ。お。あ。の。び。と。
御。左。衛。門。前。お。膝。と。り。と。せ。郷。を。陶。入。道。主。の。賞。鑒。と。り。て。公。子。の
傳。と。な。り。れ。に。あ。ら。ば。や。公。子。幸。う。と。あ。ら。ま。れ。の。色。お。と。と。ま。ま。あ。
と。も。い。う。あ。め。し。て。諫。ま。わ。り。せ。ら。れ。さ。と。い。か。と。あ。な。り。と。入。り。て。俳。優。と。や
らん。士。人。お。あ。る。ま。じ。た。り。と。り。を。か。ま。入。公。子。と。あ。と。し。ま。て。火。坑。に。陥。る。
時。も。あ。る。べ。た。を。君。候。の。病。い。の。り。の。為。れ。旅。路。お。か。れ。と。り。と。と。

君侯の御且、よしく。郷等支士の父れ上る。自かせれり。ごりひ
なれ。べらやま。れ。事。か。れ。べ。に。が。公。子。何。足。ぬ。り。か。た。は。は。あ。く。
一人の彩頭の為、お終身の疑と、お負ひ多らん。ゆい。と。い。か。く。
よ。そ。お。え。と。ご。さん。郷。先。づ。つ。有。ち。備。つ。の。り。り。も。ご。れ。居。ら。れ。よ。僕。
と。これ。より。山。は。お。扈。從。し。と。て。す。つ。ん。は。馬。を。よ。せ。よ。御。多。入。公。子。
と。あ。り。と。あ。く。じ。の。り。を。は。お。郷。先。づ。つ。有。ち。備。つ。言。を。出。さ。い。久。成。
ら。さ。め。お。ひ。ぬ。ん。日。来。の。怪。力。お。そ。為。し。と。て。顔。え。い。し。集。り。
唇。を。れ。娼。婦。声。妓。の。徳。角。顔。の。る。い。し。さ。あ。も。不。似。人。な。と。ね。
その。ら。ひ。や。う。お。と。と。や。あ。ひ。あ。づ。ま。ひ。と。り。か。の。し。お。れ。と。ふ。
く。と。座。が。立。ば。五。郎。躰。吉。と。と。と。あ。ら。み。我。身。の。う。ご。あ。く。
と。と。り。と。も。七。の。國。れ。ま。し。と。れ。大。内。義。興。の。二。男。か。う。り。妍。女。を。得。

ま。く。お。り。か。な。ご。う。お。お。ま。う。せ。ご。と。ん。今。宵。御。先。づ。つ。有。ち。備。つ。ご。此。
花。街。の。い。ご。あ。ひ。の。旅。森。の。憂。を。な。ぐ。さ。め。ん。と。の。そ。か。く。ひ。か。る。
と。郵。も。居。と。れ。と。別。な。れ。を。と。と。と。人。と。も。や。我。も。又。父。君。の。は。
病。愈。え。せ。ま。ひ。し。よ。あ。ら。ま。び。の。酒。飲。ん。と。せ。し。負。を。や。づ。り。し。躰。吉。を。
次。へ。さ。び。よ。と。ら。つ。お。か。な。を。が。し。た。言。お。躰。吉。う。へ。さん。言。も。か。く。は。ご。う。
あ。と。あ。れ。く。と。座。を。退。と。此。事。父。の。長。を。請。つ。よ。告。ぐ。處。が。と。を。
んと。手。前。ご。あ。ぐ。と。あ。く。め。て。幼。より。つ。ひ。と。れ。奴。を。招。と。徹。夜。お。
山。に。へ。そ。り。そ。が。せ。ま。た。れ。郷。先。づ。つ。有。ち。備。つ。と。獲。生。し。と。ら。し。と。勇。
と。出。し。あ。ま。ご。の。娼。妓。を。よ。ひ。つ。ど。ひ。盃。の。う。ご。と。ひ。と。絲。竹。の。音。を。公。
ゆ。あ。ご。と。五。郎。の。身。ご。う。う。う。う。た。ら。ゆ。より。昔。婦。が。色。香。を。と。か。く。
三四日。と。い。に。さ。び。より。居。る。名。勝。と。ら。ん。を。も。ら。せ。家。お。海。人。念。

も絶みぢれとありたればありとほの。なのおふ曙の方れ耳ふ入りて打
驚と。柳の齒としく使めて作りし山に入らじし。君侯の命
全愈とありと陶入道が告越せし。けしつりありて申へ入らせむ
りゆと。夫とがしれむもかく。吾嬬がうす。汝忘とる。そんより病
とりつりして城外の別墅の引こり。御太清つ有を備つが外と對
面ともあしぬりて。そるけと道と一人馬も鞭うらて室積めを
通つれ。を蝶吉が羊不團公も夜中往来し。うひ道の経
公りとまじし。諫ととめ。まふてしれど。謀とまよと。こまごまて
我とおもひ。汝も知とく。馬も馳り。歩行めて。進ひと。づり。りの汝
あり。で。まじし。今宵より。我ふつ。そそひ。まよよ。と。し。る。わ。に。か。な。く。
ありひ。おまは。父長元清つ。母の阿闍我公子。お供ある。と。じ。め。公子の

命もん。ゆ。何あても。背ひ。な。の。れ。さ。し。命の善悪と。と。た。ま。ん。と。
諫。お。な。の。ど。り。あ。つ。と。ま。ま。な。た。も。の。知。ぶ。ま。に。あ。ら。は。げ。す。の。上
ふあした。ゆり。な。と。な。び。と。れ。人の諫。ま。あ。ら。せん。汝が。如。公。子。の。命
の。ま。つ。た。ま。と。と。人。と。諭。し。あ。ひ。又。と。ま。じ。し。と。ら。室。積。の。花。街。より。の。道
ま。ま。同。ひ。ま。か。ら。せ。し。あ。も。は。つ。つ。と。じ。め。お。諭。し。た。れ。ゆ。た。と。
いと。ほ。し。げ。を。や。く。は。し。ま。ち。つ。つ。其。夜。より。奔。馬。お。追。ひ。ま。ご。り。て。
室。積。の。往。来。お。影。の。ど。と。く。に。付。を。ひ。ぬ。と。じ。め。の。な。と。ら。え。て。へ。も
知。ら。ず。り。し。が。悪。り。を。や。く。ま。ま。お。ま。い。ひ。あ。て。蝶。吉。う。行。状。目。よ。は。し
て。不。正。と。よ。か。ら。ぬ。ら。の。と。り。ご。な。れ。ど。母。の。阿。闍。我。を。か。り。も。父
長。元。清。つ。が。耳。お。入。り。ま。だ。な。長。元。清。つ。を。か。く。とも。不。知。ま。じ。ら。る。と。れ
と。入。聞。ま。り。の。ま。ま。な。中。の。鑑。と。と。譽。あ。ひ。て。室。積。の。柳。巷。お。間

かく往くも蝶吉新規ふ場ふ処の俸金もあつたものなを
いうてうたのけぐくべと母のそのごとくせよとせしめて蝶吉は
疑ふそのおくりしとかん。さふ冷泉小太郎隆豊は其のあり
たり。室老冷泉兵衛が兒あつた年いと若うしりて心操ふふ
文学刀鎧の術あもつたかたに支名高うりしより世子周防介
義隆の傳ふぞ付られり我隆詩歌管絃禪法などこの
りあつとぬく憂其原伯父大内太郎輝弘と曙の方れ奸計あり
知れと搜知り。ふ五郎義順とかなをものにして禍の根を断んと
とつてを苦しめしむ此やとふ五郎城外の別荘引とり夜こ
室積の章基ふ継来しものと聞られ刺客を用へと秋末と
つとよるとびて阿彌兒鴨詔草蝶五郎をひそくに招け家ふ

のこめてて人のおきてを不知とせしむひなれ命がうけてそのむ
をたれりあり諾べとやといふか蝶五郎従来狭氣はよくその上
母の阿園とも隆豊が父兵衛が恩恵をうけければ無二諾女兒
さう既小一日の情小百年の身とあやしん況仕士ふ於也十
余年の恩小一の命まわらせんといとやとるべし公をおうせむ
りて耳にじよされ隆豊も口はじよせ點頭合ひ眞と表へ別
且さう此蝶五郎容儀の美のこなき髪黒く艶中りあり
より濡髪と諱名あよびりれとぞ母の阿園が丹誠小よりて隆豊
とともふ弓馬刀鎧の術より文学あすて公をとらぬ又天資
かほよくあて鹿の角を裂きと指めて竹の節を挫ぐかく
我仕士ふつけ給りりさふ五郎の身の上とあやふされかくも



どきどき
と有る
二入と殺
す



どきどき
と有る
五郎と前
人

知れで五郎と吾嬬が容色あけりつと野外の別荘へ
室積まで十四五里の道のやどを蝶吉ひとり従ひて夜更けに
往しぬ馬と野馬と號し駿足蝶吉を放駒とよげし
早走一日と山口の城入りて双親の起居小膝を屈一日の室積の
郭不在群妓の吹弾不懐を伸せり。こまやうにこれとわづかれ
半日山口より一日半夜を室積不在るまでし頃ハ雷鳴月
中旬五郎の此曉より吾嬬がりに居るをさぐりて
高丘郷九清の三原有右侍打連まゝ入あり曙の方公子は夜
此花柳を通ひる及のほどぬやがさめひ吾嬬が身を贖く別
館不並夜行もさまりぬ公子の伊公を回ひてさつれぬ
内命あてまかりたり。公子の伊公と不同とも知りなれど吾嬬

主の胸裏聽従あそひあり流るるべと聞けど吾嬬の足向もせと
妾ごとく後の公子の外誰か知んと番眼おかくれ五郎の母君の恩
もあつたはさうとひとぬいど今宵とめづしく打連もてぬ
れをじひとりきぐせといを手に席上俄お振ひく冬の二日れ夏
の日もさいつお入つ暮れもあはぬ痛飲を蝶吉えうゆてをや
晩涼あひうひとぐらふ今日のをやく帰らせまひ翌の夜又も馬
ひととあれは主人も我々が馬足いうで蝶吉およどん日のあれ
ららあは促したつれ吾嬬のあはしとさあれを五郎とあつひ
かくさめ馬お跨出らる。蝶吉の口おそひ御九清の右侍を
右ふささひ世のさか人のうへなど語りくし行ともはしお室積より
一里あまうりころかな野原といへる海濱あはしかりぬ此あまうり南

と因防洋の海蒼々浮根の松数千本天不尊地ふ這ひたふ屈
右は盤糸が如く招が如く。雙るあり。離れあり。千状萬態に
ひ入えれハ高砂住吉も枝を俯し。須磨赤石も色とまらぐ。幾望
の月じのり。海風徐ふ吹て。虚情いもんこほし。月ありて。酒うこ
ハ遺憾なぐん。竹筒よりまれとて。蝶吉を室積ふとせ。久し
ともなぐ。田川のやよりまてあり。蝶吉が帰るとて。おれんと馬より
下。松が根。尻うけ。おのを。おのひもろい。ひとりの壯士。手帕もく
顔と裏。裳とく。かげ。霜又提げ。走り。奇り。ふ五郎。めぐて討て
か。郷。左。侍。有。右。侍。周。章。お。ぐ。ら。中。外。隔。て。ぬ。と。あ。り。せ。と。し。と。こ。み
て。挑。闘。を。ふ。五。郎。も。め。と。つ。れ。援。多。人。も。彼。壯。士。ひ。ち。い。色。を。く。ふ。五。郎
と。め。ふ。う。け。て。お。士。が。刀。を。う。ら。ち。う。ひ。く。火。を。と。ち。と。時。と。あ。り。ま。の

うらひとて。目前。霽。り。り。て。油。と。共。も。碧。り。り。し。天。ふ。一。朵。此。鳥。雲
あ。ひ。ひ。り。月。と。か。く。せ。る。不。も。好。風。お。り。雨。降。ち。り。電。光。ひ。り
め。れ。霹。靂。鳴。轟。く。ふ。五。郎。稟。性。雷。が。お。そ。れ。癖。お。し。て。顔。色。青
ひ。き。刀。法。も。こ。と。と。と。壯。士。お。り。と。つ。け。入。れ。お。郷。左。侍。も。ら。塞。ま。
公子。馬。お。御。て。室。積。の。方。に。奔。り。ひ。蝶。吉。お。め。ひ。と。ま。り。援。刀。せ。ま。と
い。と。せ。ま。入。蝶。吉。が。お。ん。ま。で。我。い。う。も。防。ん。と。う。け。さ。が。と。刀。鐔。め。と
より。折。と。く。花。散。鋒。下。り。肩。先。四。五。寸。切。込。と。尻。居。お。倒。り。郷。左。侍
後。お。ま。り。有。右。侍。つ。と。お。ひ。お。り。て。横。ま。を。ら。ん。と。ま。れ。ち。の。重。訓
お。ま。り。仰。向。お。倒。り。お。え。向。も。せ。と。雀。躍。して。ふ。五。郎。の。お。り。と。ま。れ
方。お。ま。一。文。字。お。飛。び。う。れ。あ。の。や。ふ。五。郎。一。刀。の。下。お。命。と。う。し。い。ひ
あ。んと。え。れ。処。お。枚。蝶。吉。電。光。の。う。ら。う。ひ。ま。に。遙。お。え。と。あ。宙。が



舞古
 公子五郎と
 搜て蝶五郎と
 戦ふ

誰そとおのりや。しつぞや冷泉小太郎隆豊をか。つれは。野郎
蝶五郎とらつれそのふて。隆豊がたのこを諾てより。日めづべ
罹日月とのむせし。此やどやうく。と。海よく。吾も吾場を贖へ。室
積の夜行止なば。近よれ。つと便所て。即夜道ふ待居て。十九
仕あせし。小蝶吉。小妨られ。公を。や。と。か。と。ども。病後と云。蝶吉
かの法めまがり。か。た。や。と。討。つ。と。對。つ。あ。め。ふ。ん。怒。ふ。仕。と。て
討。つ。も。せ。が。隆。豊。ま。の。の。の。上。ぞ。ひ。と。も。づ。此。場。と。立。退。と。又。の。付。を
終。ん。ふ。志。じ。と。と。び。き。れ。ら。ら。の。お。り。ひ。定。め。次。ま。く。に。跡。も。と。と。と。と。
戦。と。不。慕。心。蝶。吉。も。此。者。捕。へ。と。謀。主。も。知。れ。ぬ。に。西。士。が。歎。取
あ。が。せ。と。と。と。と。も。口。と。と。と。と。も。お。り。人。も。霹。靂。り。よ。う。は。い。鳴

とこめれた主人の。の上。の。又。容易。討。と。ん。敵。も。め。あ。れ
を。試。あ。の。と。ひ。く。か。あ。も。つ。け。入。れ。け。と。ひ。も。な。く。と。と。り。の。刀。閃。く
電。蝶。五。郎。を。跡。づ。か。し。て。奔。り。行。く。蝶。吉。沈。思。し。て。二。人。の。帶。傷。お
と。と。と。と。し。耳。を。塞。ぎ。経。を。誦。て。お。し。と。れ。ふ。五。郎。と。や。う。く。と。馬。よ
抱。の。の。室。積。の。必。街。と。し。て。し。と。れ。さ。り。

松平五郎

稲代女

東後清主

東後清主

雙鯉蝶白糸冊子第四册



柳風亭

Handwritten text in cursive script (sōsho) within a rectangular border, consisting of several vertical columns of characters.

Vertical text on the right edge of the page, including the number '四三' (43) and '九三' (93).

